谷原小だより 10月号

平成25年 10月2日
練馬区立谷原小学校
校長　眞瀬　敦子

豊かな心を育てる子供たち　　校長　眞瀬　敦子

「夜の学校」を読んで　　6年　大畠　凌

いじめる側といじめられる側。どちらも根は深い。　いじめられている人の心は常に助けを求めている。深くて暗い心の谷の中で…。その叫びに誰も気づかず、その谷に閉じこもることが多いだろう。そのうち、自分を傷つけたり自殺をしてしまったりするかもしれない。

そうならないためには「助けたら今度は自分がターゲットになるかもしれない。」などと気にせず、勇気を出していじめられている人を助け、味方になればいいのだ。「いじめをやめなよ。」と言うのではなく、いじめられている人に対して支える言葉をかけ続けること。一時的ではなく、持続的にかけ続けること、いつも変わらずに味方になること、それが一番だ。

いじめっ子がいじめる理由は「ムカつく」や「気にくわない」などであろう。「ムカつく」とは何であろう。嫉妬や嫉み、性格の違い、恨みなどがあるかもしれない。しかしそのような思いで人を傷つけてはならないのだ。

他の例もある。自分が嫌われていると知って、自分がいじめられるのが怖くて、いじめる側に立っている場合もある。いじめが「助けてほしい」というサインだとしたら、いじめっ子が悪いと決めつけることはできない。「いじめる方が悪い」と決めつけて叱ってばかりいたら、そんな子は心がズタズタになるだろう。一方的に決めつけて叱ってはいけないのだ。

本当は優しい性格なのに、違ったイメージが先行してしまう場合もある。何かがきっかけで広がってしまった、本当の自分とは違うイメージを崩すのは難しい。嫌々いじめをしていることもあるかもしれない。

もちろん普通はいじめる側が悪いが、いじめる側にも何か事情があるかもしれない、ということを気に留めるべきだ。自分はいじめる側なのか、いじめられる側なのかという選択ではない。また、いじめられる側は悪くなく、いじめる側が悪いというのとも違う。いじめられている人を支えながら、いじめている人の事情を理解して、やめるように働きかける。どちらの側に対しても、支え合うことが大切なのだ。

「夜の学校」は、いじめは絶対いけないということや、いじめる側、いじめられる側の心情を理解することの大切さ、そのようなことを改めて考えさせてくれた一冊であった。

昨年ほどの猛烈な残暑もなく、学習にスポーツにふさわしい、爽やかな季節となりました。
先日は5年生と一緒に武石移動教室に行ってきましたが、子供たちは本当に仲がよく、たとえ誰かが失敗しても、声を荒らげることもなく、互いに自然な形で協力し合っていること、よく考えて話を聞いていることに感心しました。

また、上記の作文は6年生が読書感想文として書いたものです。学級便りに載ったものが私の目にとまったのですが、こんな風に子供たちがしっかりと考え、行動に移すことができるようになってきたことを大変嬉しく思いました。

実りの秋、子供たちが様々なことから沢山学んで、豊かな心の実りへとつなげられるよう、私達も精一杯努力します。

11月1日には研究発表会があります。是非今の谷原小の姿をご覧に、学校へ足をお運びください。